

金沢大学附属図書館報

## 第58回 金沢大学暁烏記念式記念講演

# 近代社会における宗教の役割 仏教とウェーバー

愛知学院大学教授 立 川 武 蔵



## 1. 『ブッディスト・セオロジー』と いう方法

仏教は現代においてどのような思想を提供することができるのか。わたしはそのような観点からの仏教研究を「神学的研究」と名づけています。「神学」とは、自らの考え方と自らの時代への対応を一致させる研究をいいますが、わたしの考え方を講談社からシリーズとして発表しております。今日のお話はこのシリーズ第5巻の始めにあたります（『聖なるもの 俗なるもの ブッディスト・セオロジーⅠ』（2006）、『マンダラという世界 ブッディスト・セオロジーⅡ』（2006）、『仏とは何か ブッディスト・セオロジーⅢ』（2007）、『空の実践 ブッディスト・セオロジーⅣ』（2007・8）、『ヨーガと浄土 ブッディスト・セオロジーⅤ』（2008・3予定）。

## 2. マックス・ウェーバーの方法

ドイツの宗教社会学者マックス・ウェーバー（1864～1920）には『宗教的現世拒否のさまざまな方向と段階の理論』という論文がありますが、この論文は、われわれが扱おうとしている否定の契機にかんする考察にとって示唆的です。ウェーバーは人間の行為を世界観、目標および手段という三要素の観点から考察しました。彼は宗教行為における倫理、特に否定的な態度をとる宗教的倫理を取り上げました。倫理にはかならず規制、つまりある種の否定が必要となります。ウェーバーは、宗教的現世拒否のさまざまな方向と段階について論じながら、「現世に対して否定的な態度をとる宗教的倫理がそもそもどんな動機から成立して、どんな方向に展開していったか。つまり、その考えられる意味は何だったのか。その理論的図式を構成しながら概観しておくことが適当かと思われる」（「宗教的現世拒否の様々な方向と段階の理論」『ウェー

ーバー社会学論集』(濱島明・徳永恂共訳, 青木書店, 1971年, 232頁)と述べています。

さらにウェーバーは次のようにも述べています。

一方に神の意を介し神の道具として行為する実践的禁欲があり, 他方には行為ではなくて, 所有を意味する神秘主義の思弁的な救済所有がある。この救済所有の場合には, 個々人は神的なものの道具ではなくて, 容器であり, したがって現世的な行為は徹底して非合理的かつ現世外的な救済状態にとっては, 危険な存在と見なされる(「宗教的現世拒否の様々な方向と段階の理論」『ウェーバー社会学論集』(濱島明・徳永恂共訳 青木書店 1971年 234頁)。

ユダヤ・キリスト教的な伝統にあって, 人間は, この地上において神が自身の国を作ろうとする際の道具である, とウェーバーはいいます。ここでは行為に肯定的, 積極的な意味が与えられています。しかし, 神の道具となって神の思召しに適う行為をなすためには, 人間は自分たちの行為のある側面に対しては否定の手を延ばさねばなりません。

### 3. 現世拒否の四つの態度

ウェーバーはさきほどの引用箇所が続いて宗教的現世拒否のさまざまな態度を次の四つに分けて述べています。すなわち(一)現世内禁欲, (二)現世逃避的瞑想, (三)現世逃避的禁欲および(四)現世内神秘主義です。

第一の現世内禁欲では, 行為の禁欲が現世的職業における労働によって, 被造物としての墮落を制御するように作用します。ピューリタニズムの場合には, 労働者であれ, 商人であれ, 神の国を実現するための道具なので, 自分

たちの職業なり労働が神の「おぼし召しに適うべきもの」であると同時に, 労働は神の命じた行為であると考えられます。ウェーバーのいう現世拒否とは, 禁欲というかたちの否定であって, 神によって創られた自然あるいは社会の存在そのものを拒否・否定することではありません。

第二の現世逃避的瞑想は, 例えば, 出家し, 家長の責任も捨てて, 現実の社会的人間関係に直接携わることなく, 個人的な精神世界の中に引きこもるかたちの宗教行為ですが, ウェーバーはこれを現世から逃避して瞑想に専念するといった種類の行為と名づけました。ヨーガ行者は家を捨て, 家族から離れ, 私有財産も持たずにひたすらヨーガに専念するのですが, 彼らはそのような代償を払ってでも, なお「お釣りがくる」ような, 何か「良きもの」が約束されていると思うからこそヨーガをするのです。世俗的な「財」あるいは繁栄に満足することなく, 「それを超えた何ものか」を望むのです。

第三の禁欲的態度にあっては, 第一番目の態度と同じように, 怠惰, 贅沢, 浪費などは否定を受けますが, 現実の社会生活を積極的に営むという態度からは引き下がります。例えば, 修道士たちは現世に身を置いています, 規律を守りながら禁欲的な生活を送ります。ヨーガ行者のように「神」を自分の身体の中に入れようとしません。

第四の現世内神秘主義は, 世界の中に身を置きながら神秘主義の方法を追求する人々の態度です。現世から完全に逃避してしまうのではなくて, 世界の中で社会人の一員として機能しながらも, その人の精神的世界においては神秘的な経験を求めるあり方をいいます。

後世, 大乘仏教のいくつかの部派は密教的な要素を強めます。インド大乘仏教のかなりの部分が密教(タントリズム)の要素を濃厚に有することになります。タントリズムにおいては,

ウェーバーのいう第四の態度が顕著です。僧侶たちの行き方に第四の態度の例を求めるまでもなく、俗人のヒンドゥー教徒たちはもちろんこの第四の態度を有しています。

#### 4．ウェーバーの「器」という概念

ウェーバーの「器」という概念は宗教行為の理解について勝れて有効なのですが、ヒンドゥー教や仏教にそぐわない場合もしばしばです。例えば、ヨーガ行者の場合にはウェーバーのいう「個々人」は、究極的な意味では器ではありません。その器がなくなった時にこそ光が輝くのですから。外的に見れば行者の身体あるいは心の中のことですから、身体（あるいは心）を「器」と呼ぶことはできるかもしれません。しかし、ヨーガの伝統から考えるならば、器というものがあるかぎり、ヨーガ行者は光には接することはできないのです。また、ヒンドゥー教や仏教では、人が神の器ではなくて、神（世界）が人の器です。

ウェーバーは「個々人」といいますが、この個々人とはいったいどのような人のことでしょうか。ウェーバーはおそらくこの「個々人」という概念によって社会的に確立された人格を有する人間一人ひとりを指していると思われます。一方では、彼が「神の器」という場合には、キリスト教的な神をいうわけではなく、世界あるいは人間と本来自己同一的な聖なるものを「神」と呼んでいるのです。

もしもアジアの宗教においてキリスト教的な神観を有しながら、しかも神の器になるような個々人が存在するというような形態が見られたならば、ウェーバーのいう現世拒否の四形態はまたよりいっそうの普遍性を有したことでしょう。しかし、アジアではウェーバーのいう「個々人」はいないのかもしれませんが。

#### 5．大乘仏教における現世拒否

第四の態度が、その後の大乘仏教の主流となりました。今日の大乗仏教徒がウェーバーのパラダイムの中で自らの位置を見出そうとするならば、第四の態度においてであります。ウェーバー自身はほとんど触れてはおりませんが、浄土教やタントリズム（密教）の発達にともなって、大乘仏教では古典的ヨーガといった瞑想以外の方法が勢力を持つようになりました。例えば、浄土信仰やタントリズムに見られるような、「人格神」を崇拜対象とした実践方法です。それは非人格的な真理、例えば、中世原理としてのブラフマン（梵）を器としての体内において悟るというのではなくて、自分の外に立ち現れる仏教の神々、例えば阿弥陀仏とか、『法華経』の無量寿如来とか、密教の大日如来といった「神」に対する交わりであります。この種の崇拜形態は、「神の器となる」という特質づけが正しいとは思えません。

#### 6．世界宗教における宗教倫理

ウェーバーの四つの現世拒否の態度を説明する際に述べているのは世界宗教における宗教倫理です。ユダヤ・キリスト教的な伝統と、仏教・ヒンドゥー的な伝統を対比させながら、世界あるいは現世に対して否定的な態度を取る場合のありかたを彼は述べています。ウェーバーは社会におけるキリスト教者、ヒンドゥー教徒あるいは仏教徒が自分たちの宗教的財を求めるにあたって、社会にたいしてどのような態度をとったか、あるいは現世に対して拒否的な態度をとるなかで彼らのもとめる宗教的在、神の恩寵とか悟りとかをどのように求めていったかという視点から述べています。

しかし、ウェーバーの論究の中では、わたしには宗教の本質と思える聖なるものがいかにし

て可能なのかという問題は扱われていないように思われます。われわれは、宗教が現実社会のなかで機能していく場合には人々は現世すなわち世界に対してなんらかの否定的な態度を取らざるを得ないということを見てきました。しかし、社会の中における人々が個人的な宗教行為の結果としての財を求めない場合には倫理的否定的態度は、ほとんど認められないということを忘れてはならないと思います。

つまり、ウェーバーが扱っている宗教形態は主として、すべて個人的な宗教的精神的形態、つまり神の恩寵による癒しとか長年にわたる修行によって悟りを開くとか何らかの精神的救済というものが問題になっている宗教なのです。しかし、われわれが宗教一般を扱うとき、あるいは宗教の本質はなにかというときには個人的な宗教的救済が問題にならない形の宗教の伝統をも無視することはできません。

## 7. 「聖なるもの」の根拠

われわれは宗教と呼ばれてきた人間の営みにおいては、否定的契機が聖なるものを顕現させる際には重要なものであることを見てきたのですが、その否定的契機の「以前に」あるいはそれを超えて「聖なるもの」の存立を認めているのです。われわれがこれまで述べてきたような「否定の手」が「聖なるもの」の顕現を現実的なものとするものがあつたとしても、その「否定の手」が「聖なるもの」の存立の根拠であるわけではありません。ウェーバーが考察した現世拒否の四つの態度は、宗教という形態の存立が社会的に認められ機能しているということを疑うことなく、それを前提として宗教倫理を問題にするのです。いいかえるならば、ウェーバーは人々がそれぞれの宗教に基づく否定的倫理

を問題にしているのであって、その倫理的行動に駆り立てている「聖なるもの」そのものについて考察しているわけではありません。

聖なるものと人間の否定的倫理とが別個のものであることはキリスト教においては仏教におけるよりもよりいっそう明確です。すなわち、キリスト教において否定的倫理が「聖なるもの」の成立根拠ではないことは明らかです。ウェーバーの現世拒否の四つの態度にかんする考察は、人間が歴史の中で「聖なるもの」である神に対してどのような行為をなしてきたか、あるいはなそうとしているか、についてかなり実質的な考究ではありますが、人々にそのような態度を採らせてきた何ものか、それが神であれ、悟りであれ、それが人間にとってどのようなものなのか。そうしたものは、これからの人間にとって必要なのか否か、という問題にはウェーバーは答えようとはしません。ウェーバー自身、宗教とは何か、という問題に正面から関わっているわけではないと思われま

立川 武蔵

TACHIKAWA Musashi

名古屋市生まれ、愛知学院大学文学部国際文化学科教授、国立民族学博物館名誉教授。名古屋大学文学部哲学科（印度哲学）卒、ハーバード大学大学院修了。名古屋大学文学部教授、国立民族学博物館教授を歴任後、2004年4月から現職。

専門は、アジアの宗教文化、インド学、仏教学。『空の思想史』講談社 2003. 6  
『般若心経の新しい読み方』春秋社 2001. 12 他著書多数